

## 奄美以南地域向け飼料用サトウキビ新品種「しまのうしえ」の育成

(独) 農業・食品産業技術総合研究機構 九州沖縄農業研究センター  
作物開発・利用研究領域 境垣内岳雄

## 1. 開発の背景

我が国初の飼料用サトウキビ品種として「KRFo93-1」を育成したが、サトウキビの重要病害である黒穂病発生の懸念から、鹿児島県奄美以南地域での普及を見合わせてきた。奄美以南地域でも自給飼料基盤の強化が喫緊の課題であることから、新しい品種の育成に取り組んだ。その結果、黒穂病抵抗性に優れ、多収となる飼料用サトウキビ新品種「しまのうしえ」を育成したので、以下に特性を紹介する。

## 2. 「しまのうしえ」の品種名について

本品種は「島の牛のエサ」として広く使われ、「島の牛の恵」になるように願って、「しまのうしえ」と命名した。

## 3. 「しまのうしえ」の来歴・特徴

(1) 黒穂病抵抗性に優れる製糖用品種「NiF8」を母親、乾物収量が高く、再生草の生産力の高い「KRSp93-26」を父親として、1998年に交配して育成した品種である(図1)。

(2) 黒穂病抵抗性は「NiF8」と同程度の“強”であり(表1)、抵抗性が“中”の「KRFo93-1」よりも優れる。

(3) 種子島および徳之島における乾物収量は「KRFo93-1」と同程度で、年間あたりローズグラスの約2倍の高い収量が得られる。(図2)

(4) 栄養価を示すインビトロ乾物分解率は「KRFo93-1」と同程度である(データ略)。子牛や乳牛への給与も可能であるが、特に、繁殖雌牛の粗飼料としての利用に適する。

## 4. 今後の期待

奄美以南地域において「しまのうしえ」が活用されることにより、牛のエサ不足が解消され畜産

経営が改善されることはもとより、製糖用サトウキビなどとの耕畜連携を進めることにより、南西諸島農業の高位安定化を実現する架け橋になることを期待する。



図1. 「しまのうしえ」の草姿  
1) 種子島での株出し2回目の草姿(2010年8月19日)。

表1. 「しまのうしえ」の黒穂病検定結果

品種名	発病株率 (%)	判定
しまのうしえ	10.0	強
NiF8	8.1	強
NCo310	82.0	極弱

1) 検定は有傷接種法で実施した。

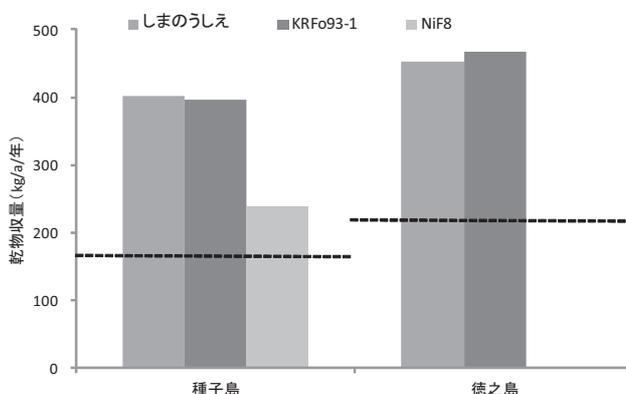


図2. 「しまのうしえ」の乾物収量  
1) しまのうしえ、KRFo93-1、NiF8は年2回収穫体系で栽培した2年間の平均値(合計4回収穫)。  
2) 破線はローズグラスの乾物収量(乾物率を25%と仮定して、文献資料の値から算出)。